

乗って居らなかつた。けれど電車に乗つたといふことだけで心が落付いて、これからが——家に帰るまでが、自分の極楽境のやうに、気がゆつたりとなる。路側のさまざまの商店やら招牌やらが走馬燈のやうに眼の前を通るが、それがさまざまの美しい記憶を思ひ起させるので好い心地がするのであつた。

お茶の水から甲武線に乗換へると、をりからの博覧会で電車は殆ど満員、それを無理に車掌の居る所に割込んで、兎に角右の扉の外に立つて、確りと真鍮の丸棒を攫んだ。ふと車中を見たかれははッとして驚いた。其硝子窓を隔て、すぐ其処に、信濃町で同乗した、今一度是非逢ひたい、見たいと願つて居た美しい令嬢が、中折帽や角帽やインバネスに殆ど圧しつけられるやうになつて、丁度鳥の群に取巻かれた鳩といったやうな風になつて乗つてゐる。

美しい眼、美しい手、美しい髪、何うして俗悪な此の世の中に、こんな綺麗な娘が居るかと思うつた。誰の細君になるのだらう、誰の腕に巻かれるのであらうと思ふと、堪らなく口惜しく情けなくなつて其結婚の日は何時だか知らぬが、其日は呪ふべき日だと思つた。白い襟首、黒い髪、鶯茶のリボン、白魚のやうな綺麗な指、寶石入の金の指輪——乗客が混合つて居ると硝子越になつて居るのを都合の好いことにして、かれは心ゆくまで其の美しい姿に魂を打込んで了つた。

水道橋、飯田町、乗客は愈多い。牛込に来ると、殆ど車台の外に押出されさうになつた。かれは真鍮の棒につかまつて、しかも眼を令嬢の姿から離さず、恍惚として自からわれを忘れるといふ風であつたが、市谷に来た時、また五六の乗客があつたので、押つけて押かへしては居るけれど、稍ともすると、身が車外に突出されさうになる。電

解説

1 文学と都市空間

文学世界とは言つまでもなく、言語によって構成された虚構の空間です。しかし、それでもなお作中人物の生活が現実味を帯びて感じられるのは、実在する街を舞台に彼らの生活が描かれているからでしょう。小説中の地名とは、虚構と現実とを地続きにする「通路」の役割を果たしているようです。読者は、実在する町の印象を作中の地名に重ね合わせて虚構空間をイメージし、作者の側もそれを承知で地名を小説に織り込むわけです。主人公の行きつけの店を、渋谷にするか銀座にするかでは、人物造形に決定的な違いが生れます。それほど、地名には強い意味喚起力（記号性）が備わっています。

街のイメージは時代によつて変わります。今やオタク文化の発信地として世界的に有名な秋葉原も、敗戦直後は進駐軍払い下げの電子部品を扱う問屋街であり、やがて家電の巨大市場として復興期の消費文化を支える街に成長しました。近代文学を読み解く際には、その時代の街の様子を調べる必要があります。発表当時の読者には当たり前でも、現在では見失われてしまった小説空間への「通路」を新たに見つけ出すこと。この方法は、高度成長期の再開発で都市が景観を大きく変え始めた七〇年代以降、建築学や空間哲学の分野で「都市論」が脚光を浴びるなか、前田愛によって文学研究に導入されました。

線のうなりが遠くから聞えて来て、何となくあたりが騒々しい。パイと発車の笛が鳴つて、車台が一二間ほど出て、急にまた其速度が早められた時、何うした機会か少くとも横に居た乗客の二三が中心を失つて倒れ懸つて来た為めでもあらうが、令嬢の美に恍惚として居たかれの手が真鍮の棒から離れたと同時に、其の大きな体は見事に筋斗がへりを打つて、何の事はない大きな毬のやうに、ころ／＼と線路の上に転り落ちた。危ないと車掌が絶叫したのも遅し早し、上りの電車が運悪く地を撼かして遣つて来たので、忽ち其の黒い大きい一塊物は、あなやと言ふ間に、三四間ずる／＼と引摺られて、紅い血が一線長くレイルを染めた。

非常警笛が空気を劈いてけた／＼とましく鳴つた。

本文・初出「太陽」（一九〇七・五）／底本「田山花袋全集 第一巻」（復刻版、九三・四、臨川書店）

2 「郊外」の誕生

文学における「都市論」の成果は、心理過程や人物の葛藤といったストーリー展開自体（図）ではなく、背景（地）に退いていた都市という「地模様」を浮かび上がらせることで、小説空間の基層に横たわる意味喚起力を解明した点にあります。下町風俗を描いた小説とされてきた樋口「葉」たけくらべ（一八九五（明二八））について、前田愛は、一見他愛のない子どもたちの喧嘩に、消費型の都市文化と村落共同体との対立を指摘しています。当時の吉原はまだ下町（都市）などでなく、農村がスプロール化した市街地に飲み込まれていく過程にあつたというのがその根拠で、それは明治一〇年代と四〇年代の二枚の地図の比較によつて、説得力を持っています。

日清・日露両戦争の勝利で、日本は工業国へと急成長し、東京は地方の人々を工場労働者やサラリーマンとして吸い寄せ始めます。旧江戸地内の中枢は深刻な住宅不足に陥り、周辺の農村部が次々と開発されました。千駄ヶ谷は、現在でこそ山手線内の都心ですが、当時は「牛の鳴声」の聞こえる牧場と「新築」の家屋が入り混じる典型的な新開地だったのです。この頃の東京の絵地図を見ると、現在の山手線が遠く地の果てを走るように描かれています。

- 作中の地名は虚構と現実をつなぐ「通路」。
- 地名が持つ特有の意味喚起力を解明し、ストーリーを読み直そう。